彦根市埋蔵文化財調査報告 第1集

# 城町円常寺遺跡

## ═ 調査概要報告書 ═

昭和56年3月

彦根市教育委員会
彦根市埋蔵文化財発掘調査団

# 序

私たちの彦根市は，井伊家35万石の城下町として発展してまいりましたが，都市近代化は本市にも波及し，地方都市としての風格を整え，都市基盤の整備も進みつつあります。こうして城下町彦根の面影も失われつつあるなかで，本市教育委員会では，このような建造物を調査し，昭和51年に「彦根の町並」，昭和55年には「彦根の民家」を刊行してまいりました。

このたび，往時の生活様式・文化を理解するうえで必要とする武家屋敷の遺構の発掘調査を，彦根市埋蔵文化財発掘調査団に委託いたしました。ここにその調査概要報告書を刊行される運びとなり，調査団長・宇野茂樹彦根市文化財委員をはじめ，この発掘調査にご協力賜りました調査団員の方々に謝意を表するとともに，本調査に終始変らぬご理解をいただきました，カネボウハウジング株式会社に対して厚くお礼申し上げます。

最後に，この報告書が，今後城下町彦根を理解するうえで少しでも役立てば幸いであります。

昭和56年3月

彦根市教育委員会
教育長　河　原　保　男

# はじめに

築城以降の彦根は，現存する古民家・古文書や，城下町絵図により，ある程度は知り得るのであるが，当時の人々の生活等の実態となると，これらの文献等では限られるものであり，ここに，中近世を対象とする考古学上の調査の必要性が発生するものであります。

本調査で出土した，磁器・陶器等の日常品は，当時の生活を生々しくつたえるだけでなく，商品の流通等の当時の経済活動をも知りうるものであります。この意味で，彦根のもつ政治的な意味だけでなく，経済的・文化的な意味をも明らかになしえられるものと考えられます。

元来，考古学において中近世に対する調査・研究は非常に遅れており，このことが注目されるようになったのはここ10年来であります。

この意味で，彦根市教育委員会の指導を得て，カネボウハウジング株式会社のご理解で実施できた城町円常寺遺跡の発掘調査は，武家屋敷の遺構の確認という成果を上げ得たことで，まことに喜びにたえない次第であります。その成果をここに報告し関係各位に対し謝意を表するものであります。

昭和56年3月

彦根市埋蔵文化財発掘調査団
団長　宇　野　茂　樹

# 例　　言

1. 本書は，カネボウハウジング株式会社の宅地造成事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査概要報告書である。

1. 本調査は，彦根市教育委員会の指導をえて，彦根市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。

1. 本調査は，滋賀県教育委員会文化財保護課・近藤滋技師の指導・助言を得，彦根市教育委員会社会教育課・本田修平が現地調査を行った。

1. 本調査の実測図の作製および本報告書のトレースは，主に調査協力員・林定信が行った。

# 1. 位 置 と 環 境

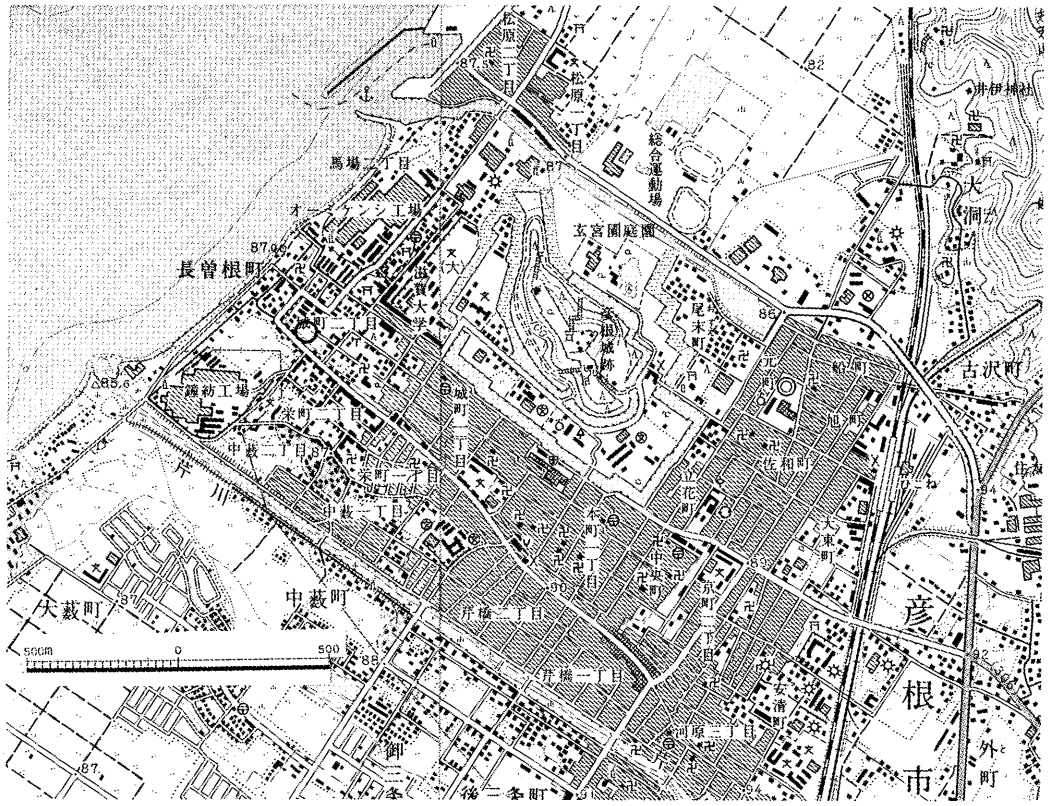
城町円常寺遺跡は，彦根市城町二丁目字円常寺56番10地に所在する。

城山以西の湖岸側は，明治時代以降に近江絹糸・鐘ケ淵紡績等の工場が建ち並ぶ地域となり，早くから城下町の景観を失った所である。しかし，東方には特別史跡「彦根城跡」が指呼の間に望まれる。

彦根城は，琵琶湖と中山道を意識して築城されたものである。

中山道は，現在の彦根市中心地に松原内湖等の低湿地が広がっていた関係上，等高線で100ｍのラインを走り，高宮宿，鳥居本宿が形成された。この宿から城下町に入る道は，高宮宿より沼波を通り芹橋口に至る道と，鳥居本宿より切通坂を通り里根口に至る道とが主なものである。

城下町としての彦根の構造は，最終防御地域であり，藩政の中心地である彦根城を取り巻くように濠・武家屋敷・町屋が配置されている。




図－1　調査地位置図

第１・第２郭は，藩政の中枢部ともいうべきところで，天守，表御殿を中心とした城郭部と，内濠・中濠の間に配置された藩主別邸の槻御殿や家老等上級武士の屋敷である。第３郭は，中濠と外濠の間で，北側を除く三方を囲む。この地域は，主に100石以上の中級武士の屋敷と，町人の町屋で構成されていた。また，外濠の内側は，土塁・竹藪をめぐらしていたという。城町円常寺遺跡はこの第３郭に所在する。第４郭は，外濠の外に配置されたことから，第３郭を内町というのに対して外町と呼ばれた。この外町は，下級武士の屋敷，足軽の組屋敷，町屋から構成されていた。

城下町の構成の概要は前記したようなものであったといわれるが，城町円常寺遺跡の所在する第３郭の武家屋敷・町家の配置は，当遺跡が含まれる西部地区，中濠に面した地区，東部の外濠に面した地区に武家屋敷が置かれ，中部に町人町が配置されていた。

以上のように江戸時代の彦根は，中世から戦国時代の軍事的な防御のための城から，城と城下町が一体になるように構成された近世都市としての計画がなされていた。

# 2. 調査に至る経過と目的

当遺跡の所在する城町は，もともと市街地であり，以前には，㈱カネボウの社宅と畑地であった所である。この地約5000 m²をカネボウハウジング株式会社が買収し，分譲住宅を造成することを計画した。

滋賀県教育委員会文化財保護課は，この計画の事前審査の段階で埋蔵文化財の発掘調査が必要であるとして，原因者と協議がなされ，彦根市教育委員会が調査主体となり，調査機関として彦根市埋題文化財発掘調査団に調査を委託された。

発掘調査は，昭和55年1月上旬から始められ同年3月下旬まで実施された。遺物図面の整理および報告書の作成は，昭和55年度の事業とした。

彦根市においては，町並・民家の調査は，すでに実施されていたが，考古学的な発掘調査は，昭和54年度に実施された市立西中学校校舎改築に伴う発掘調査1例を数えるだけであった。それ故に，城下町における地下遺構の実体は，ほとんど不明に近い状態であった。このため，今回の発掘調査の主目的は，地下遺構の有無を確認することとした。また，遺構の存在が確認されたときは，その深さおよび残存状況を確認することとした。

調査区域約5000 m²のうちに半分は，カネボウの社宅が建っており，地下が攪乱されていることが予想されたので，この地区を調査地区から除外し，地下遺構の存在が予想される畑地を調査の中心にすることとした。また，調査の方法も，前記した主目的にかなうトレンチ掘りとし，遺構が確認された場合は，そのトレンチを拡張もしくは，トレンチを増やすこととして調査を実施した。

トレンチは，最初4か所設定する計画であったが，遺構の存在が確認されたため，2か所増やし結果的には6か所のトレンチが設定された。

# 3. 調　査　結　果

築城以前の彦根は，松原内湖に浮かぶ島状の彦根山と湿地状の土地であったという。この土地に城下町を建設するために，多くの部分を埋めたてて造成したという。

今回の調査でも，前記の事実を示すような状態が認められた。このことを含めて，まず全体的な土層を書く。

第１層は，現状が畑地である関係で耕作土が約30～50 cmほどの厚さである。第２層は，黄灰色土層が約20 cmの厚さがあり，この層までは畑地の土層であると考えられる。第３～５層は，遺物，炭焼け土，山土等が薄い層状に混入する整地層で，遺構面は２時期あることが確認できた。第６層は，３トレンチで確認されたように川や湖岸で見られるような砂層になり，水が湧き出してきた。

〈１トレンチ〉

１トレンチは，カネボウ社宅より昭和新道に抜ける小道の東南側の畑地に設定した。この畑地は，井戸・貯水塔等の構造物が多く，遺構の残存状態はあまり良くないと推定された。トレンチの形もこれ等の構造物の関係上「Ｌ」字型となった。

土層は，耕作土をバックホーで掘り込み，黄褐色粘土層の上面で一旦止めた。この黄褐色粘土層は，巾５ｍほどで切れる。これより北東側は，遺物の混じった整地層となる。

整地層を約30 cmほど掘り下げると焼け土が面的に広がる。シックイの破片が検出された。このシックイの破片は，彎曲を持っており，容器の破片と考えられる。この面では，遺構は確認されなかったので，再度，人力にて掘り下げた。地表より約70 cmほど下げた時点で，人頭ほどの大きさの石で作られた石列が出土した。１トレンチで確認された主な遺構は，前記した石列だけであった。

トレンチ水路側は，昭和30年代に改修された時点で埋められた水路の跡が確認された。この他に，トレンチ水路側部分は，ごみ穴による攪乱が激しいが，この地点に広がる黄褐色粘土の面は，他のトレンチの結果から考えて土塁状の遺構であると考えられる。

また，社宅側のシックイ片が出土した面は，第２次の遺構面と考えられる。第１次遺構面で検出された石列は，残存状態の良い所で二段に積んであるが，石の代わりに瓦を立てた所もあり，石が抜かれている所もあるが，約７ｍ程の長さで検出された。

なお，このトレンチでのごみ穴，水路跡の掘り込みは行われなかった。

〈２トレンチ〉

このトレンチでは，はっきりと２時期の遺構面が確認された。

土塁上の遺構は，１トレンチでは攪乱のために巾が不明であったが，このトレンチでは，トレンチ端より約６ｍを計る。断ち割りを行った結果は，土層は板築状ではなく，下層の淡灰黄色粘土層と，上層の黄褐色粘土層とに分かれる。この下層よりは，馬の骨かと思われる骨が出土し，地山でないことが確認された。これ等のことから粘土を台型状に盛ったものであるが，基底部までは掘れなかった。

第２次遺構面は，トレンチ道路側に広がり，人頭よりやや大きい石数個で作られた石列が検出された。この石列は火を受けており，この付近は炭・焼け土が広がっていた。また，同一面で，穴の中に鉢を伏せ，回りを石と瓦片で囲んだ遺構が検出された。上には，シックイ片が乗っていた。

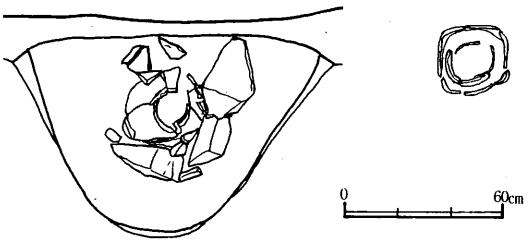
第１次遺構面は，１トレンチで検出されたものの続きと考えられる石列が約１ｍ程の長さで検出された。

土塁状遺構の水路側からは，水路跡が現状で約２ｍの巾で確認された。

２トレンチ　石で囲まれた鉢の出土状況図

〈３トレンチ〉

水路，土塁状遺構は，２トレンチと同様の状態であった。水路の中からは，水路を埋めた時に入れられたコンクリート製の杭が出土した。




４トレンチ　鉢出土状況図

第２次遺構面は，２か所の集石が認められた。集石の石は，人頭大ほどの大きさのものである。

第１次遺構面は，集石と整理穴と考えられる瓦甕片の混入したものとである。

第１・２次の両遺構面で認められた集石は，建物等の遺構が破壊されたときに当時の地表面が整理され，その時に集められたものと考えられる。

なお，このトレンチでは第５層を一部で掘り込んで第６層を確認した。第６層は，前記したように砂層であった。

〈４トレンチ〉

水路・土塁状遺構は，２，３トレンチと同様の状態で確認された。

第２次遺構面は，「Ｌ」字形をした石敷溝が検出された。この石敷溝の石は火を受けており，炭・焼け土の層が10～20 cm の厚さで上に乗っていた。この層の中には，炭化米も入っていた。またこの石敷溝から北東側約２ｍ離れた所では，穴の中に鉢を伏せ 石・瓦片で囲んだ遺構が検出された。

第１次遺構面は，桁の柱間約1.8 ｍ，梁の柱間0.6ｍで人頭よりやや大きい石の礎石が検出された。桁行は３間，梁間３間である。この土塁状遺構側では，雨落溝と考えられる２列の建物と平行した石列が検出された。この礎石群より道路側には集石等が出土した。また，ここからは，瓦製の四角の容器を穴に埋め，鉢をいれた遺構が確認された。

屋敷跡が確認されたことから，５，６トレンチを４トレンチの両側に設定した。

〈５トレンチ〉

「Ｌ」字状の敷石溝の続きを確認するために ３，４トレンチの間に設定した。

第２次遺構面の「Ｌ」字状石溝の続きは，直線となって走る。一部石が抜かれている所もあるが，巾50 cmほどで深さ約30 cmである。

第１次遺構面では，「コ」の字状の石列が検出された。この石列は，４トレンチの礎石の延長線上にあることから，屋敷跡の一部と考えられる。中間の礎石はなく，建物の外囲だけとなる。

〈６トレンチ〉

４トレンチとカネボウ社宅との間に設定したが，時間的な関係上２×２ｍのトレンチとなった。

建物跡の礎石は，４トレンチの礎石の直線上に並び，この建物が広がることが確認された。礎石は６個が検出された。

調査の結果を記してきたが，種々の条件で屋敷全体の調査までは至らず，建物跡の間取りまで復元することはできなかった。

当初，現在昭和新道と平行して走る水路が彦根城外濠の一部であると考えられており，外濠跡の一部の検出も予想された。今回の調査では現在の水路と平行して走る土塁状の遺構が確認できた。

この事実は，彦根城惣絵図にある外濠内側の土塁であることの可能性を考えさせる。水路は，以前のものが土塁の一部を切っており，外濠を利用したにしても土塁の一部を取り込んだ形で走っていると思われる。このことから考えれば，巾が８～９間といわれる外濠は，そのまま埋め立てられて昭和新道となった可能性が強い。

また，今回の調査で確認できた建物跡は，「位置と環境」で記したように中級武士クラスが配置された所であり，その所在地から見て武家屋敷跡と考えられる。

以上のように，外濠内側の土塁，武家屋敷の遺構の確認ということで，不充分ではあるが当初の目的は一応はたせたことを記して終りとしたい。

# 4. 城町円常寺遺跡出土の土器

今回の調査で出土した遺物は，日常雑器にとどまらず，銅製品等の金属器，炭化米等の出土も見ている。日常雑器の出土量は多く，瓦も多数出土している。この遺物の出土量は，古代・中世の遺跡と比較すれば格段に多い。これは，300石クラスの武家屋敷跡という遺跡の性格によるものかも知れない。

ここで報告する日常雑器は，磁器・陶器・土器と焼成技術的にも多様であり，用途についても多種多様であるが，時間的，人的制約があり，その全てを報告するまでには至らなかった。ここでは図示した主要な土器について記したい。

**○ 壺**（図版1，土器番号1）

信楽焼の「うづくまる」と呼ばれる器形の系譜を引く壷である。器形は体部に比べて小さな口縁であり，底部は欠失しているが，小さく，ひきしまると考えられる。口縁部は，外方に玉縁状に肥厚し，頸部は短い。胴部最大径は，器高の$^{2}/_{3}$ぐらいのところである。

胎土は，長石の吹き出しをみ，他の小礫を含むがよくしまっている。焼成は良好であり，内面は淡赤褐色，外面は茶褐色の鉄釉を施している。

技法は，紐土の巻き上げ成形で，タタキ締めた後にロクロナデ調整をほどこし，内面にはタタキ痕が残る。

出土地点は，5Ｔ第3層である。

**○ 擂 鉢**（図版1，土器番号2）

備前焼きと考えられ，焼きしまっており重量感がある。擂目は10条の櫛状施文具によるもので，すでに内面器壁全面に施されているが，底部は，まだ放射状に施文されている。体部は，内彎ぎみにたちあがる。口縁部は，直立して外面に幅広い縁帯をつくり，2条の凹線をめぐらし，内面には片口が作られている。底部は平底であり，不調整である。胎土は，砂粒を含むが締っている。焼成は良好であり，無釉で色彩は赤褐色を呈す。

技法は，外面上半部がヘラ削りで成形されるが，内外面ともにロクロナデ調整で仕上げる。

出土地点は，3Ｔ第4層である。

**○ 双耳壺**（図版2，土器番号3）

産地は不明であるが，陶器の双耳壷である。底部は，しっかりした高台が作られ，胴部最大径は頸部のすぐ下にある。口縁は，ほぼ直立し，短く，口縁端部は面を持ち釉が施してないことから見れば蓋のつく器形かも知れない。耳は張り付けであり，一方が欠失しているが断面長方形をなす。

胎土は若干の砂粒を含むがよく締っており良好である。焼成は良好であり，胎土は淡灰黄色で，釉は口縁部内面と外面口縁以下胴部下半部まで施されており木灰釉である。

技法は，全体にロクロナデで仕上げられているが，外面胴部下半部はヘラ削りで調整されている。また，胴部上半部は強いナデによる弱い凹線が３条施されている。

出土地点は，３Ｔ第４層である。

○ **埦**（図版２，土器番号４）

産地は不明であるが，体部は内彎してたちあがり，しっかりした高台がつく通形の陶器の埦である。

釉調は，灰黄色の透明な釉で貫乳が入り，胎土は淡黄灰色を呈ししまっている。

技法は，水挽ロクロ成形である。

出土地点は，３Ｔ第３層である。

○ **皿**（図版２，土器番号５～８）

産地は不明であるが，底部を凹め，体部はゆるく内彎しながらたちあがる。内面の一方には菊花様の浮文を張り付け，対方にヘラによる交差文を刻する。釉調は，淡灰色の木灰釉で貫乳の入るものもある。胎土は，白灰色を呈ししまっている。

技法は，水挽ロクロ成形で，内面底部にトチンの痕を残す。出土地点は，５・６が２Ｔ第３層，７・８が３Ｔ第４層である。

○ **塩壺**（図版２，土器番号９～13）

塩壷は，蓋の受け部のつくタイプと受け部のないタイプに分かれる。

受け部のつかないもの（土器９～11）は，胴部がややふくらみ，口縁部はやや弱く外面に開く。底部は平底である。

技法は，手捏ね成形後，内部ヘラ削りのもの（9，11）と，布の圧痕が認められるもの（10）とがある。口縁部内外面は横ナデ調整である。

受け部のつくもの（土器12，13）は，体部が直線的に伸び内側に小さな受け部が作られる。底部は，埋み込みか。

技法は，土器12が水挽ロクロ成形と考えられ，土器13は厚手の作りで粘土紐の巻き上げ成形と思われる。

**○ 塩壺蓋**（図版2，　土器番号14，15）

内面を弱く凹め，端部垂直に下げ，かけ部を作る。外面は平坦に仕上げてある。

技法は，内面に型をあてる型押し成形と思われ，内面に布目がつく。外面は，上面・側面ともに横ナデ調整である。

**○ 皿**（図版2，土器番号16～21）

いずれも灯明皿と考えられ，口縁端部に炭化物が附着するが，型押し成形と考えられるものと，ナデ成形のものとがある。

型押し成形と考えられるもの（16～18）は，体部が直線的に開く。

技法は，内面に布の圧痕を残し，外面には指の圧痕を残す。

ナデ成形のもの（19～21）は，体部がやや内彎して開く。

技法は，ロクロナデ成形と考えられ，内外面ともに横ナデ調整である。

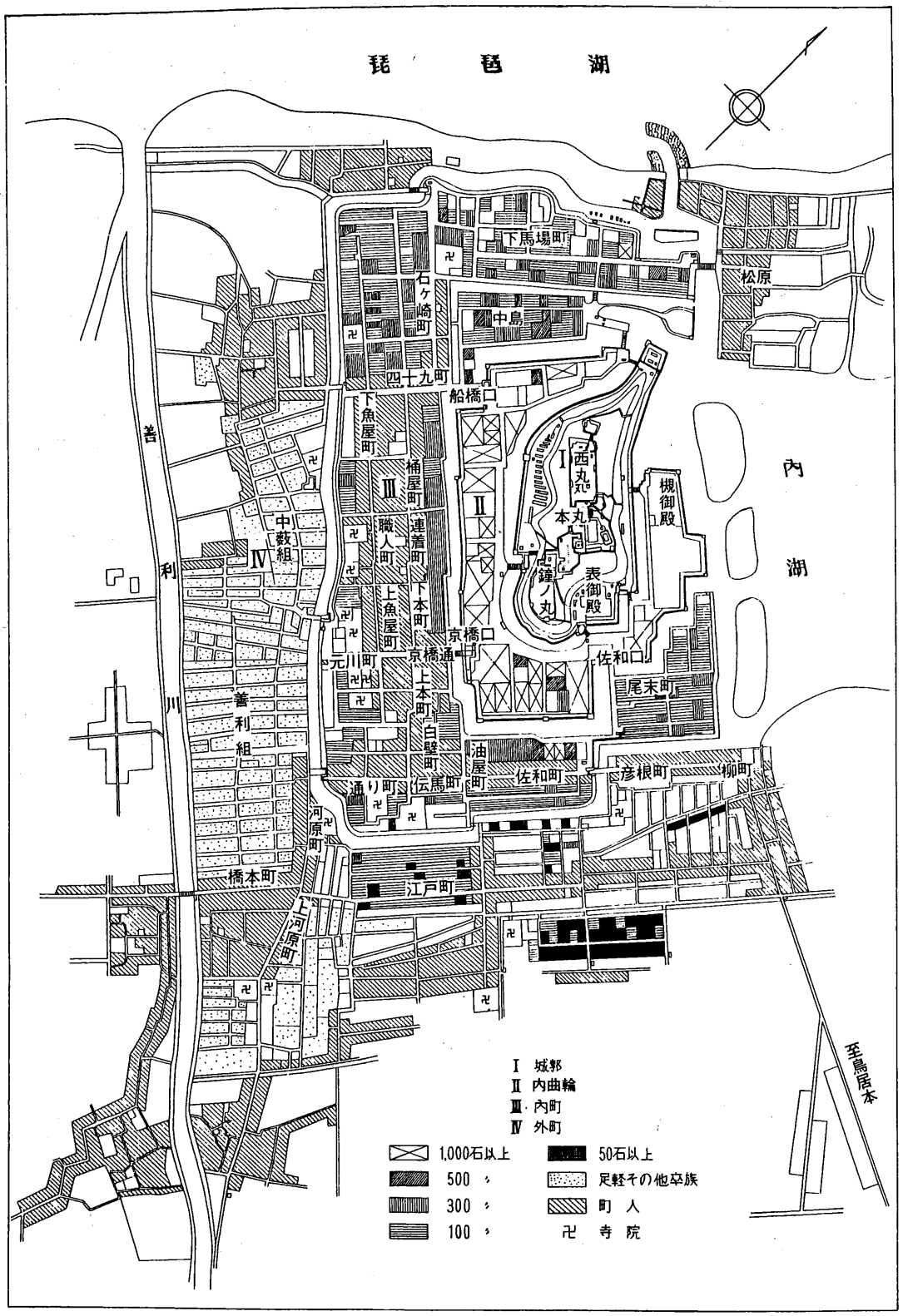
**○ 軒丸瓦**（写真図版7）

瓦は，多量の出土を見たが，その多くは平瓦であった。ここに掲げた軒丸瓦は，完形に近いものであり，巴文がえがかれている。巴文の尾は長く，ほぼ円形に巴文を取り巻く。

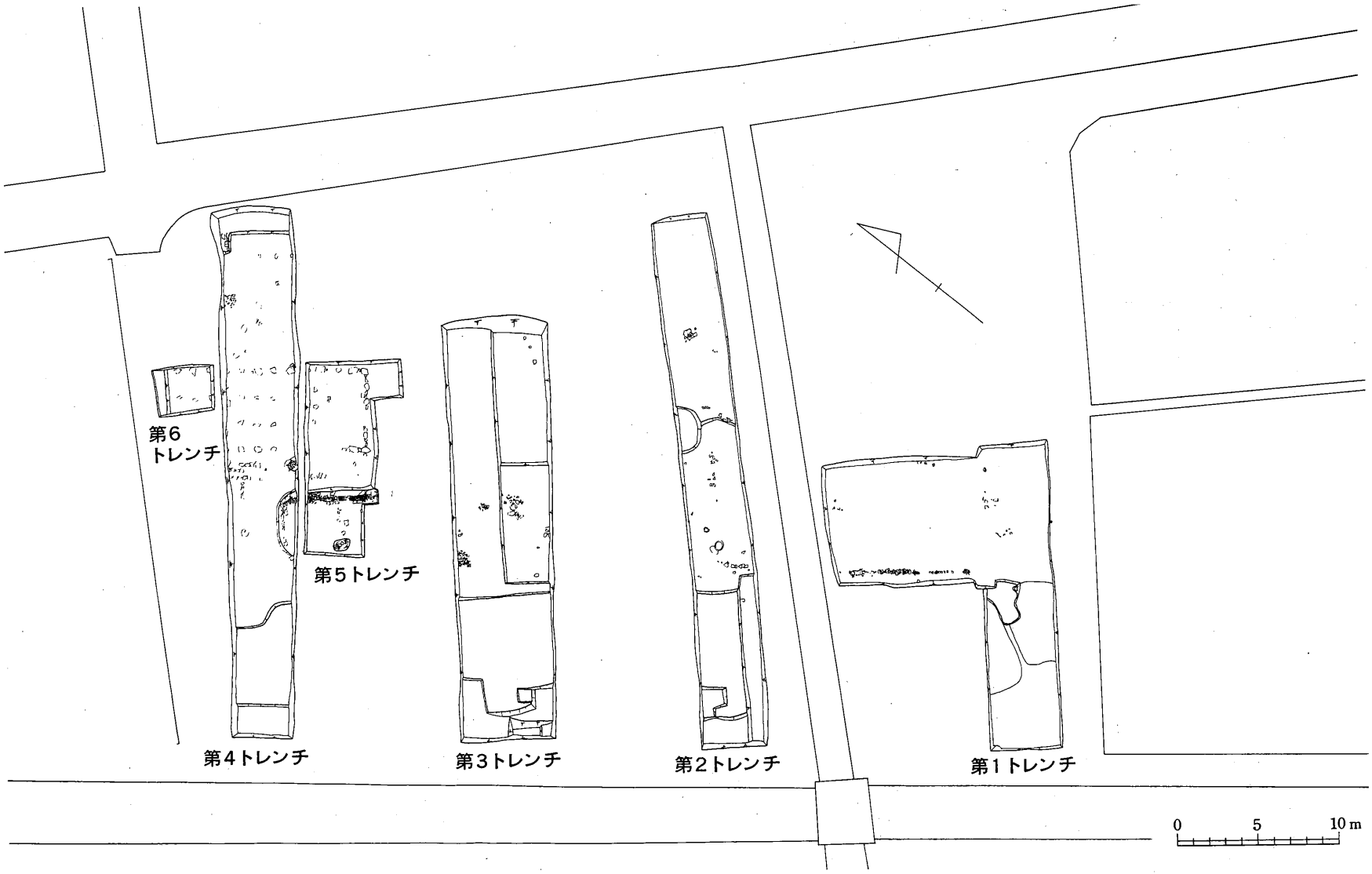
**○ 磁器**（写真図版7）

磁器の出土は，量的に多く，器形も埦・皿等があげられる。ここでは，高台裏に銘のあるもので主なものを掲げた。

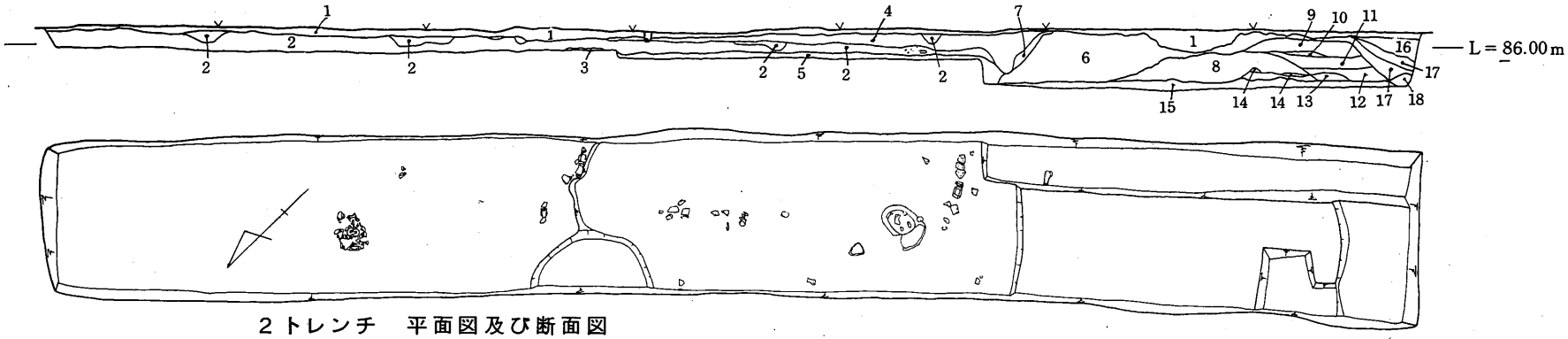
銘は，主に「大明年製」である。他に螺旋等を書いたのもあるが，ここでは掲げない。




図－2　城下町割図（西川幸治氏作図）「彦根の町並」より

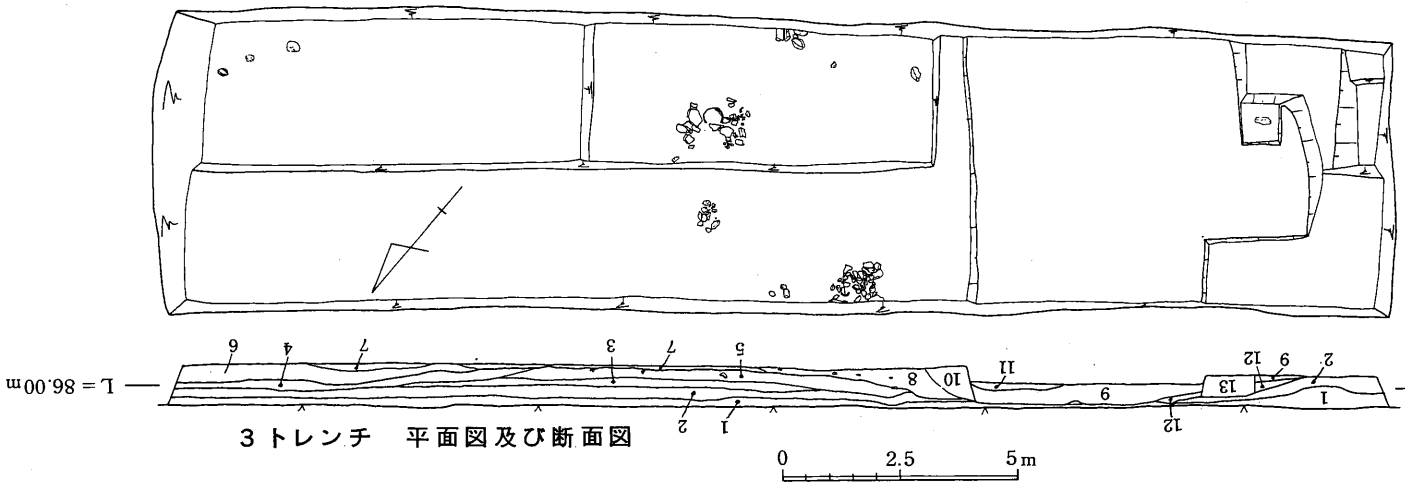



図－3　円常寺遺跡トレンチ配置図




2トレンチ　平面図及び断面図

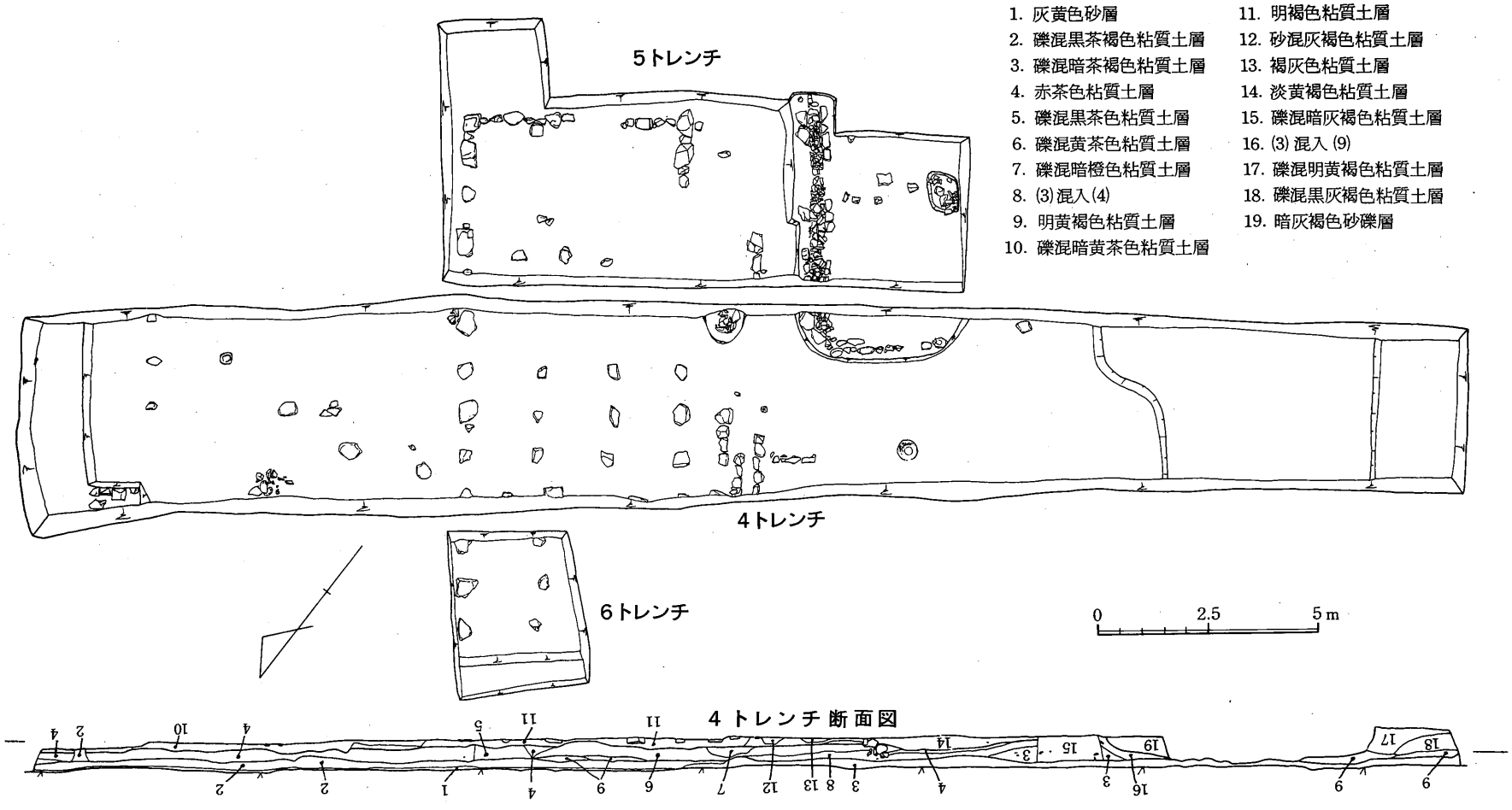
1. 礫混暗褐色粘質土層
2. 礫混黄褐色粘質土層
3. 焼土層
4. 礫混暗灰褐色粘質土層
5. 礫混暗茶褐色粘質土層
6. 明黄褐色粘質土層
7. (4)混入(6)
8. 砂混淡黄褐色粘質土層
9. 砂混灰褐色粘質土層
10. 砂混淡褐色粘質土層
11. 淡茶色粘質土層
12. 砂混淡灰褐色粘質土層
13. 淡灰黄色粘質土層
14. 黄褐色粘質土層
15. 砂混淡黄茶色粘質土層
16. 礫混入(1)
17. 礫混淡灰褐色粘質土層
18. 礫混黒灰褐色粘質土層



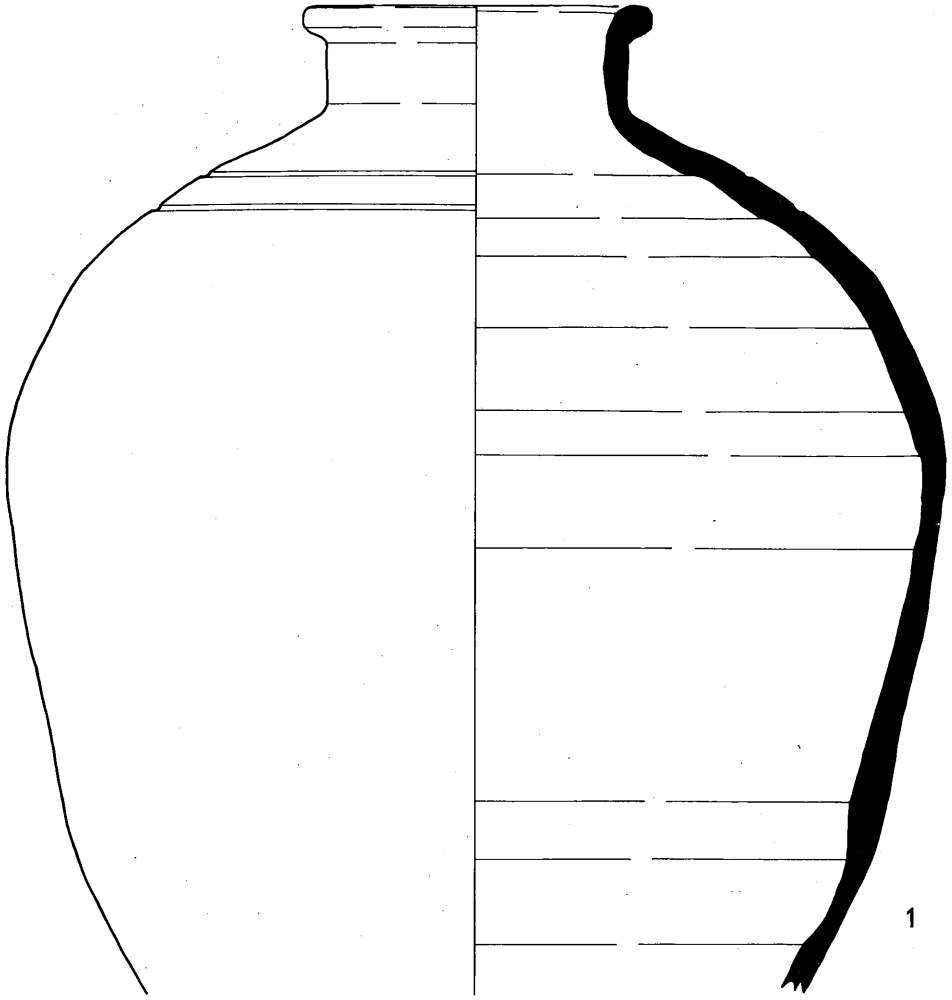

3トレンチ　平面図及び断面図

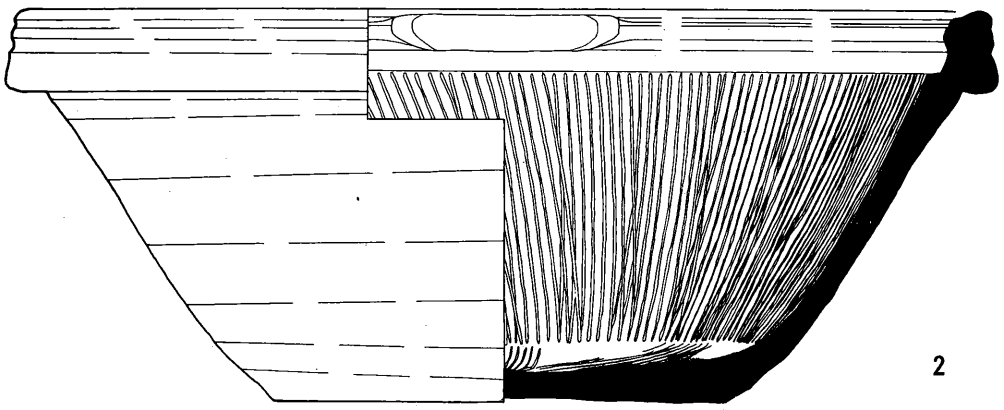
1. 礫混暗茶色粘質土層
2. 礫混黄褐色粘質土層
3. 礫混灰茶色粘質土層
4. 礫混暗褐色粘質土層
5. 礫混暗黄褐色粘質土層
6. 礫混暗茶褐色粘質土層
7. 礫混黒褐色粘質土層
8. 砂混暗灰褐色礫層
9. 明黄褐色粘質土層
10. (9)混入(8)
11. 淡黄褐色粘質土層
12. (2)混入(9)
13. 少量(9)混入(2)

図－4　2・3トレンチ平面図及び断面図



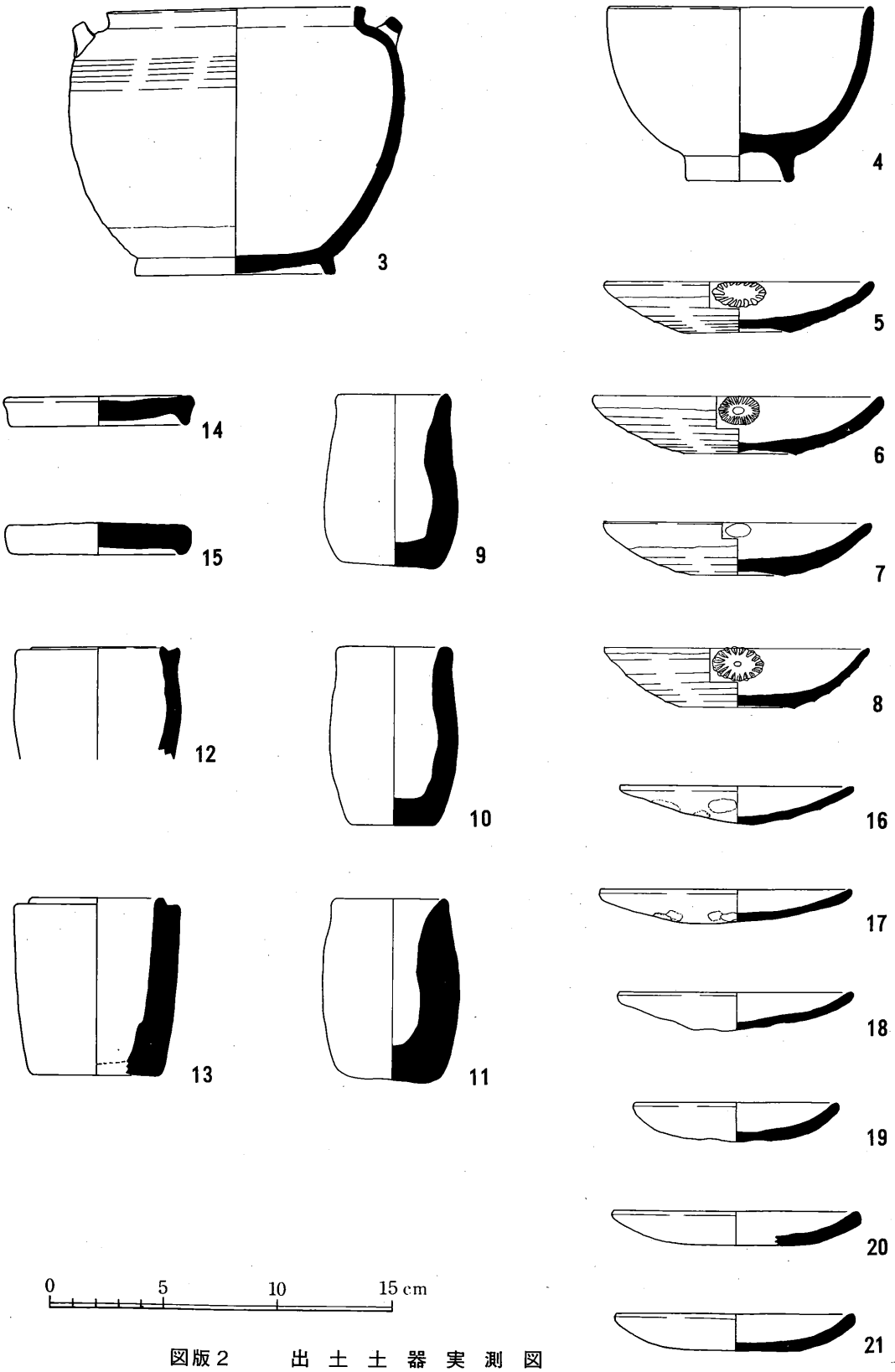

図－5　4～6トレンチ平面図及び断面図




0 5 10 15cm

図版1　出土土器実測図



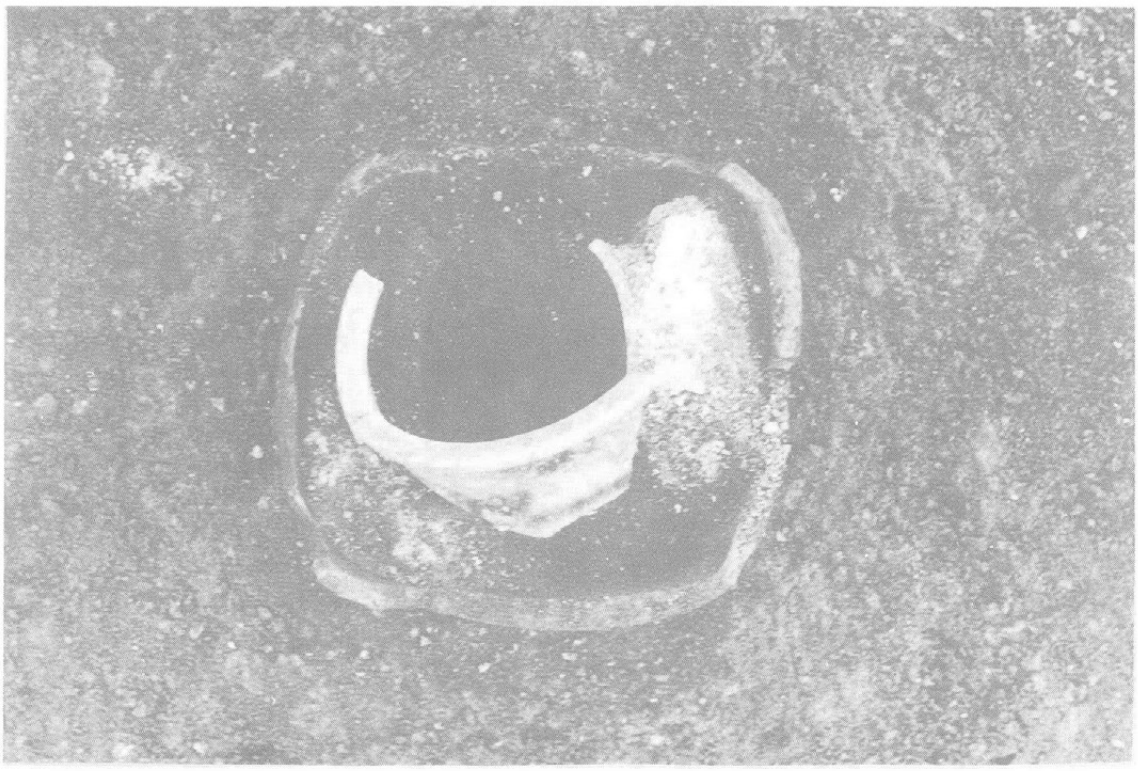

図版２　　出土土器実測図

写真図版 1

城下町惣絵図調査地附近「上田道三氏写」

4トレンチ出土石で囲まれた鉢

写真図版２

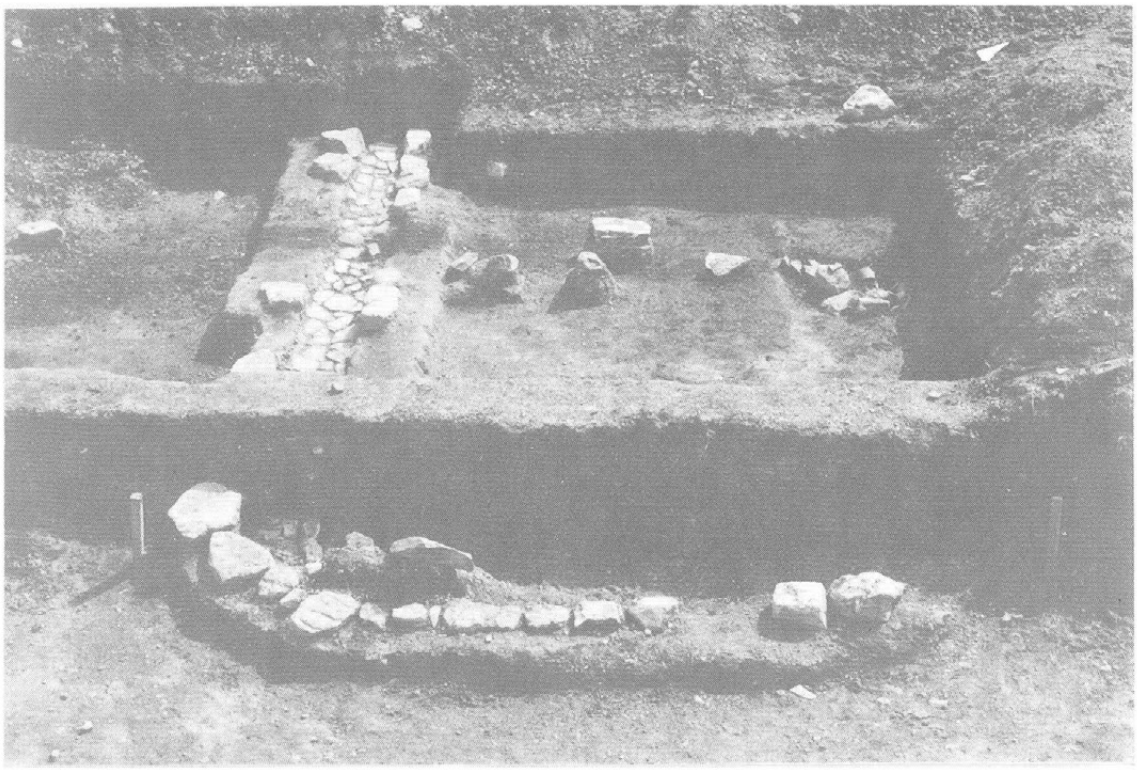


４トレンチ　瓦質陶器で囲まれた鉢

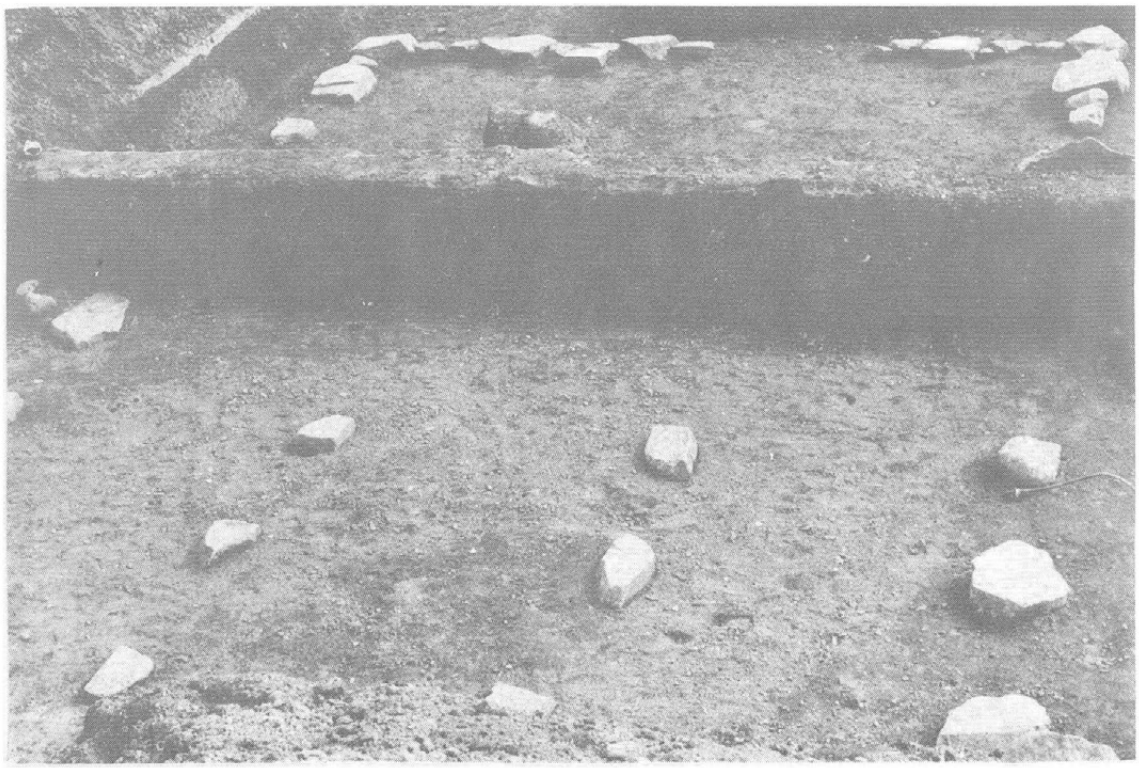
２トレンチ　石で囲まれた鉢

1トレンチ　石列

2トレンチ

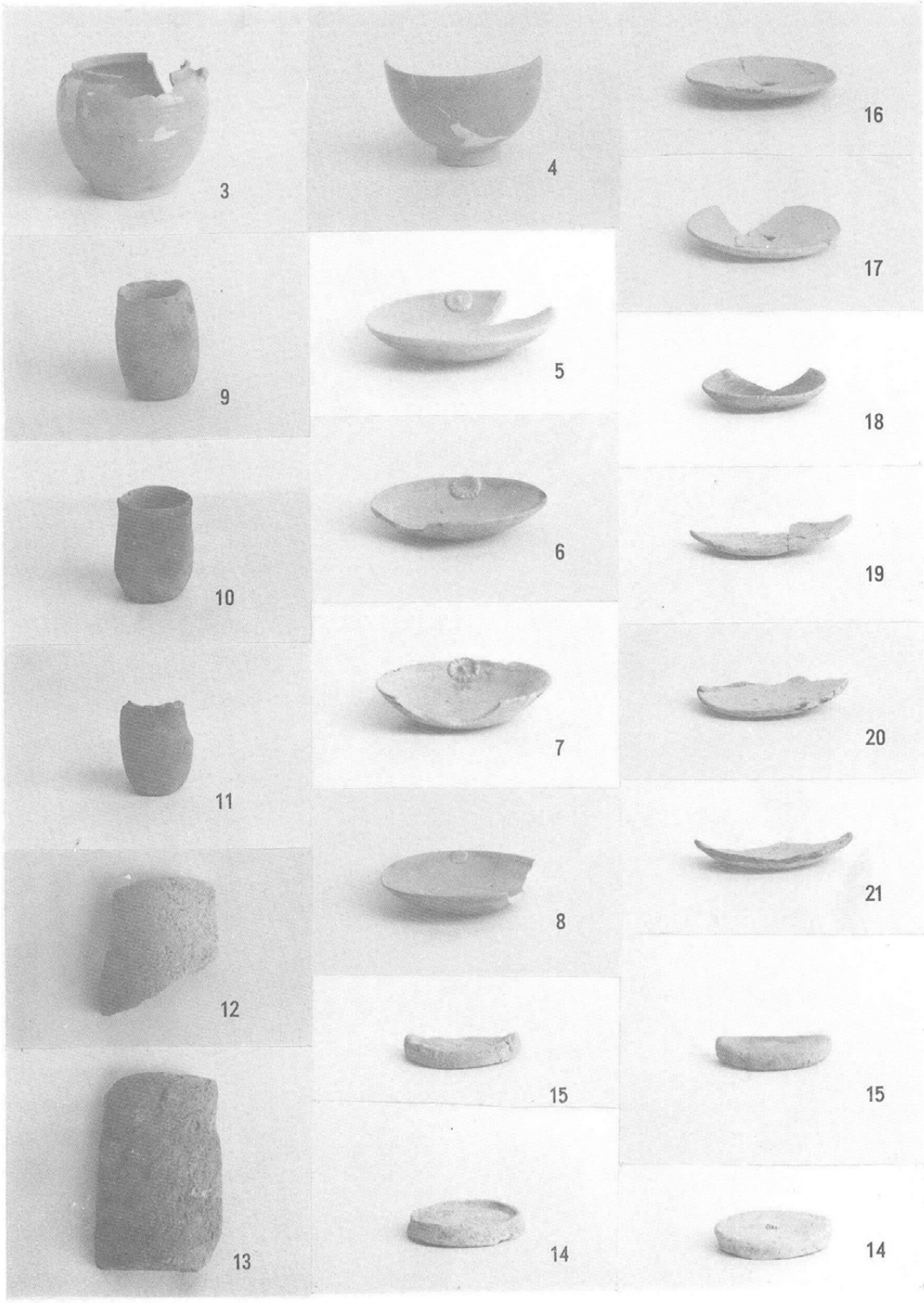


4・5トレンチ　石敷溝

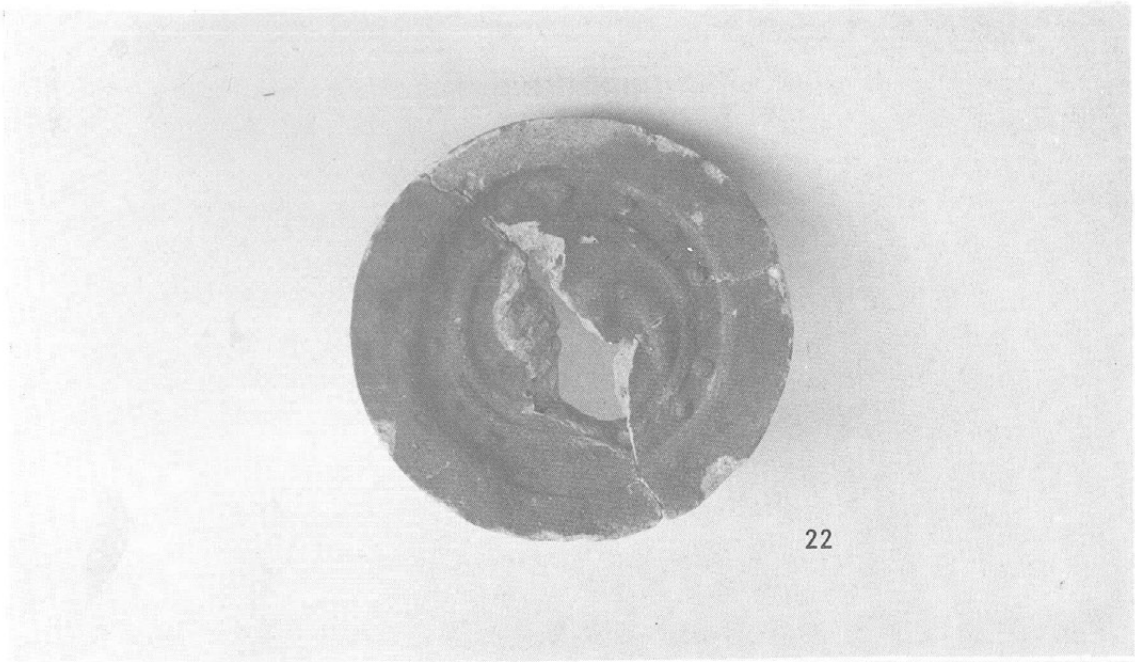


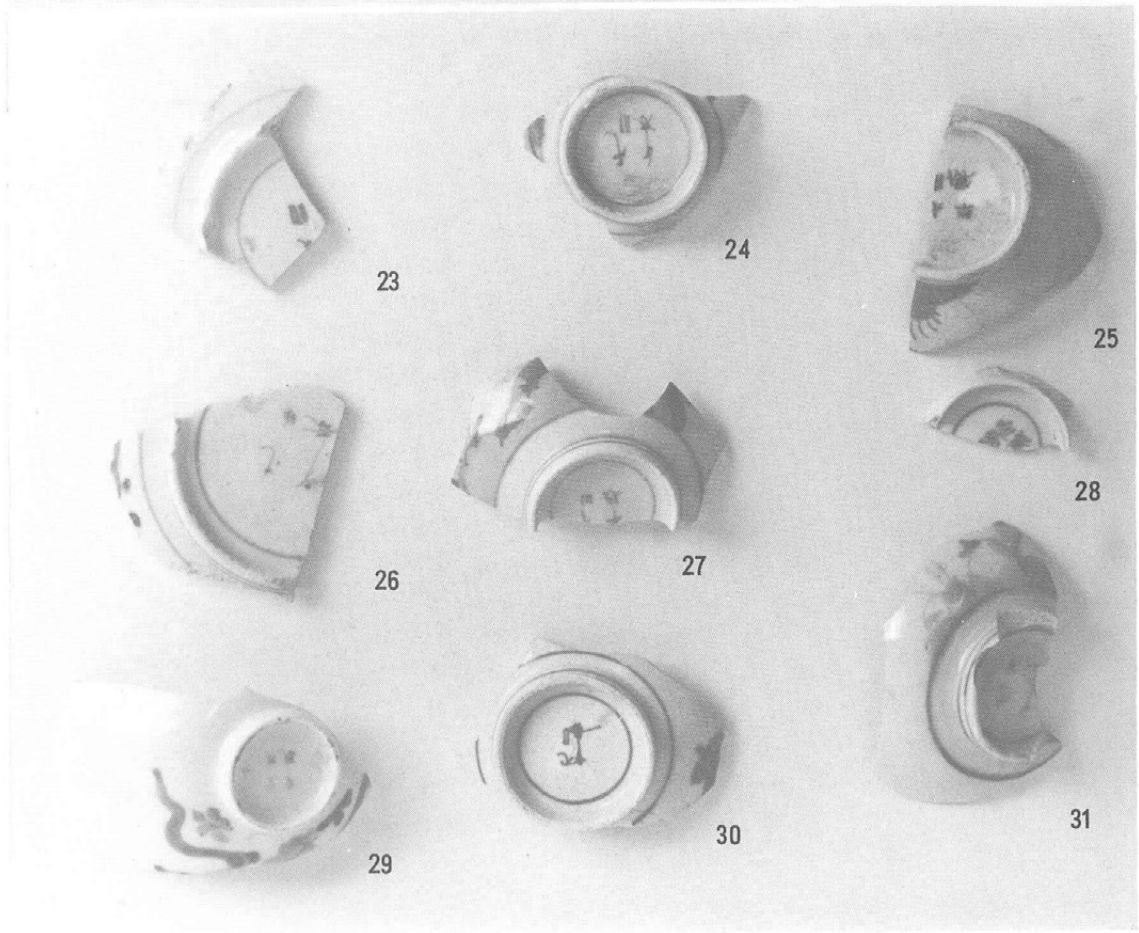
4・5　建物遺構

土 器 1・2




土　器　3 ～ 21




土 器 22 ～ 31